

(7) 高齢者居住施設における浴室環境の違いが介護労働に与える影響

川崎医療福祉大学大学院 医療福祉デザイン学専攻 修士課程 太田 明彦
川崎医療福祉大学 医療福祉デザイン学科 松本 正富 大戸 寛
川崎医療福祉大学 医療情報学科 太田 茂
国立大学法人茨城大学 教育学部 齋藤 芳徳
川崎医療福祉大学大学院 医療福祉デザイン学専攻 修士課程 野上 直紀

【要旨】

本研究の目的は、高齢者居住施設における個別対応の入浴ケア環境の構築に向けての実証的資料を得るべく、施設の浴室環境とそれに付随するケアの違いが日常介護の具体的な内容やその労働に与える影響について考察することである。具体的には、特別養護老人ホームにおいて一般入浴と座位入浴の双方に対応できる昇降式座位浴槽を導入し、集団的処遇の入浴介助からマンツーマン入浴へと体制移行する機会を利用して、その前後の介護スタッフの運動量と行動内容について比較を行った。この際、運動量は携帯型加速度計による10分毎の歩数、行動内容は1分ごとの滞在場所・行為内容を逐次記録する非参与の行動観察調査によるものとし、介護スタッフは入浴係・フロア係・浴室誘導係(体制移行後はフロア係補助)の役割ごとに分けての比較分析を行った。結果を以下に列記する。

- (1) 介護スタッフ全体として見ると、日常介護での運動量は200歩/(10分)程度で推移し、日中業務8時間当たりの換算では10,000歩程度であった。
- (2) 一方で、入浴時間の浴室誘導係の歩数のみが400歩/(10分)を超える値に突出していたが、マンツーマン入浴の導入による業務内容の変化で、他の役割のものと同様の200歩/(10分)程度に減少した。
- (3) 浴室誘導係がフロア係補助に業務が変わったことで、入浴時間帯における「食事介護」「居室内介護」「その他介護」等の日常介護への関わりが4割ほど増加した。
- (4) さらに、浴室誘導に専従するマンパワーが削減できた結果、フロア係も含めた交代での休憩時間が増加した。